樽職人

桜庭　功さん（能代製樽所）

父親の影響でこの道に

父親は山から木を切ってきて、樽の側面に使えるまで加工する樽丸職人。子どものころから職人の仕事を身近で見てきた桜庭さんにとって、「職人という道を選んだのは自然なことだった」と言います。

当時は、木材産業が元気だった時代。市内では、桶樽、柾割り、製材が木材関係の主な働き口だったそうで、市内に桶樽業者は数十件もあり、能代は全国的にも有名な桶樽の産地でした。

樽作りの昔と今

昔から樽作りは、木に対する知識と技術を要す仕事で、作業のほとんどは、人の手で行わなければなりません。そんな樽作りにも現在は、一部に機械が導入されています。

すべて手作業でやっていた時代を過ごしてきた桜庭さんは「今はとにかく骨を折らなくなった。機械が入る前はひとつの樽を作るにも労力や時間は、今の倍以上かかった。昔は真冬でも、体から湯気が出て、シャツ1枚にねじりはちまきでやったもんだ」と言います。

さらに今と昔の大きな違いは給料体系にあります。「今は一日いくらの月給制。昔は、一樽いくらの歩合制。だから一日に作れる樽が多い職人ほどお金ももらえたし、周りからも一目置かれました。昔は、とにかくみんな競うように樽を仕上げたもんです。今の若い人もまじめに一生懸命やっているが、昔は職人にもっとハングリー精神があった」と言います。

桜庭さんのように、すべて手作業でやっていた時代を経験してきた樽職人の技術は非常に高い

若い職人の手本として

終戦間もない昭和23年。15歳だった桜庭さんは樽職人の世界に踏み込み、修行を経て、28歳で能代製樽所に入りました。以来、今日まで、その手で何万樽という樽を作り出してきました。

71歳となる現在、第1線は退いたものの、月・火・木・金の週4日の午前中、能代製樽所で樽作りに精を出しています。

ここで働く若い職人は、ベテラン職人の技術を間近で見ることができ、わからないことは聞くことができます。貴重な技が、後継者不足や職人の高齢化により、継承されず消えていく。そんな時代にあって、桜庭さんの存在は貴重なものとなっています。

変わらない日々のなかで

「職人の世界は一日一日が同じことの繰り返しだ」と桜庭さんは言います。毎日毎日、同じ作業を通して磨かれた技術。それは桜庭さんにとって大きな誇りでもあります。

合成樹脂製品の登場や生活スタイルの変化で、木樽は各家庭で見ることはほとんどありません。「今は、職人の技が見えない時代。それが社会の流れだからね。仕方がない」と桜庭さんは言います。

しかし、木樽は、いまでも酒造会社や居酒屋からの需要があるほか、注文数は減りつつあるものの、漬け物樽として使いたいという、個人のお客さんの声もあります。

「ここでは、若い人たちがいるのでこれからも樽は、ずっと作られていくでしょう」。黙々と作業をする桜庭さん。その技は、時間をかけながらも、着実に次世代へ引き継がれています。

『せん』と呼ばれる桶樽作りに欠かせない道具。さまざまな角度の『せん』を使いこなす。